

当院の遺伝子検査体制の過去・現在・未来

～コロナ禍で得た成果と課題～

◎大澤 稜¹⁾岐阜県総合医療センター¹⁾

新型コロナウイルスの急速な感染拡大に伴い、診断と感染拡大防止を目的とした遺伝子検査が大規模な病院から診療所まで広く普及した。岐阜県内の中核病院である当院もその一つである。本演題では、当院での新型コロナウイルス感染拡大前後の遺伝子検査体制の変化について示し、ポストコロナ時代の遺伝子検査の在り方を考えたい。

従来の当院では、院内感染対策上の目的で結核菌群と MRSA の遺伝子検査を導入していた。これらは院内感染対策上必要と判断された場合にのみ実施しており、日常業務としての遺伝子検査は「大学病院や専門機関が行うもの」という考えが強かった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により当院でも日常業務としての遺伝子検査の導入が不可避となった。まず初めに 2020 年 4 月から RNA 抽出機器を導入し、喀痰を用いた遺伝子検査を開始した。その後、岐阜県内の感染者数増加に伴う検査数の増加が予想され、検査の迅速化のために検査材料を喀痰から鼻咽頭ぬぐい液に変更した。これにより、従来法と比較して簡易的な RNA 抽出が可能となった。2020 年 11 月には新型コロナウイルス検査の日常業務化と時間外検査体制強化のために全自動遺伝子解析装置を導入した。さらに、抗原定量検査を導入することで夜間勤務者や生化学・免疫検査担当者も検査可能とした。これらに加えて 2021 年 1 月より外注での入院前唾液 PCR 検査を開始し、現在は当院感染対策部と共同で作成した“新型コロナウイルス検査フローチャート”に基づいて検体の種類や検査方法を使い分けている。今後も様々な変異株の出現や感染動向に注意しつつ、それに合わせて当院で実施している検査法の有用性や検査体制の見直しをしていくことが必要となる。

今回新型コロナウイルス感染拡大を経験して、当院では国からの助成金等により様々な遺伝子検査機器を購入することができ、それによって遺伝子検査が日常的に行える環境が整った。さらに、遺伝子検査に対する考えも、「やりたくてもなかなか実施できない遠い存在」から「自分たちでもできるもの、やっていくべきもの」へと変化してきた。そして、この遺伝子検査を新型コロナウイルス検出のためだけで終わらせないことが重要である。今後当院では、全自動遺伝子解析装置は細菌検査担当以外の技師も使用できるようにすること、新型コロナウイルス感染症だけでなく血液培養陽性者の原因微生物の鑑別に日常的に使用していくことを検討している。また、これまで大学病院や専門機関に依頼していた高度な遺伝子検査を実施するために RNA 抽出機器を活用することを目指していきたいと考えている。このためには、コスト面や費用対効果の検討をして病院全体の理解を得ることや、様々な遺伝子検査に対応できるように技師の知識と技術を向上させていくこと、マンパワーの確保など、多くの課題を解決していく必要がある。ポストコロナ時代において、市中病院でも新型コロナウイルスに限らず、診療に役立つ遺伝子検査を日常業務として実施していくことが求められてきており、これを実現するために一つずつ課題と向き合っていかなければならないと私は感じている。

連絡先 058-246-1111（内線 5112）